

アベノミクスを「奇貨」とした買った

千葉の県人 鎌田 留吉

昨年1年間で1兆5千196億円と大量に日本株を買った外国人投資家が、年が明けるや一転大量に売り始め、1月は現物だけで1兆1千696億円の売り越しとなった。先物を加えると2兆4千663億円の売り越しとなったようだ。この売りをどのように考えたらよいのだろうか？

三菱UFJの藤戸氏は、アベノミクスの第一の矢である異次元の金融緩和と第二の矢である財政出動については一定の評価を与えながら、最も重要であるべき第三の矢の成長戦略や規制緩和に対する期待が剥落し始めたことを示唆するものと捉えている。

アベノミクスの異次元の金融緩和とそれによりもたらされた円安および財政出動に対しては評価するひが多い。しかし、ここにきてその効果を疑問視する声が多くなってきているように思える。

周知のように、異次元の金融緩和は、銀行の保有する国債を大量に買い入れマネタリーベースを増やすことにより、貸出を増やし、信用創造を起こして、マネーストックを増大させることを期待したものである。しかし、矢張りというべきか貸出は殆ど増加していない。そして、そもそも企業が投資を行うかどうかを決めるのは、金利や金余りではなく、その投資がもたらす利潤であるという至極真つ当で根本的な議論が目立ちだした。

また円安についてもそれは日本国にとってよいことだという全面賛成論から、むしろ恩恵を受けているのは自動車産業だけであり、一般国民は電気・ガス・ガソリン代の上昇という不利益を蒙っているという不満に変わってきているように思う。

また経済成長も思ったほどは伸びず、中身は肝心の一般消費が好転しているものではなく、大型補正予算の財投と、消費増税の駆け込み需要という一過性の危うい要因によることがはっきりしてきた。

従って、外国人が売ってきたのだ、という論を構えるためにこの文章を書いたのではないところが私の私たる所以である。ここからは殆ど推論なのでそのようにお読みいただきたいのだが……

そもそも外国人も（というのは私同様という意味であり、2013年に大幅売り越した金融機関と個人投資家同様という意味である）、アベノミクスなるものを全く「評価」などしてはいなかった。ただ有り余る金の投資先として、大きなマーケットではあるもののマイナス要因が多すぎる日本への投資にはなかなか踏み切れないでいた。それが12年秋から始まった円安傾向と11月半ばから始まったアベノミクスなるものを「奇貨」として、円安・株高を仕掛けた。日経225という歪な指数がはびこっている株式市場は先物・オプション・現物を組み合わせれば儲けるのは思いのままである。それが思いのほか凶に当たり、15兆円に至った。しかし、彼らの資金の根本的出所に「縮小」が始まってしまった。新興国と同様に資金は引き上げ始めなければならない。先物・オプション・現物を組み合わせれば売りで儲けるのも極めてたやすい、という次第だと推察する。 2014.2.18 記